

『つくもと!』 - 歩野スイ

※お読みいただく際はブラウザの横サイズを調節してください。より快適にお読みいただけます。

少女は一人、とりのこされてきました。

心臓は早鐘を打ち、冷汗がだんだんと額に滲んできます。次から次へと浮かんでくる良からぬ未来を、考える端から否定し、しかしそうやってどれだけ未来から目をそむけた所で、現実は容赦なく彼女の眼前にありました。

すなわち、彼女は一人であると。

もはや助かる希望はないと。

気付けば、周りを囲むように深い森が茂り、自分がどこから来たのか、どこへ行くべきなのかも分からない。上下の境すら曖昧なその場所で、彼女は一人で生きなければなりません。なぜなら、彼女は自殺できるほど強くなかったし、絶望に吞まれるほどの勇気も無かったからです。

大丈夫。きっと誰かが助けに来てくれる。家に帰ったらごはんを一杯食べて、温かい布団で寝て、友達と遊ぶのだ。皆はきっと、必死に私を探してくれているに違いない。

誰かがきっと。きっと。きっと。

雨に濡れ、獣に追われ、どれほど渇き、どれほど餓えても、彼女は願い続けました。雨の日も、風の日も、夏も冬も昼も夜も。川の水を呑んでお腹を壊した後も、空腹任せに毒の実を食べて視界が霞んでも。手足の感覚が無くなっても、日時の感覚が無くなっても、彼女はただ助けを望み、ただ生きることを望み、ただ遊びたいと、ただ助かりたいと願ひ。

雨避けにしている大樹の下で、彼女の命の灯が尽きた後も、——その四肢が骨と変わっても、なお彼女の祈りは止まりませんでした。

ああ、なんということでしょう。彼女のつたない希望は、彼女を死なせることすら許さなかった。

ヒトナラザルモノに墮ちてしまった彼女は、遊び相手と同類を求めて、今でも山の中を彷徨っています。

それが、この地に語り継がれる『とりのこされこうべ』の伝説——

がしょーん。

「やだー怖いー♪」

「H A H A H A大丈夫さマイラヴァー。君を暗闇で一人になんて俺はしないからよ！」

「キヤー！ コウ君怖いほど格好良いー！ 流石あたしの彼氏ー♪」

などと言いながら立ち去っていくバカップルを、『ふすま女』は何も出来ずに見送った。怪談もまるで通じない。目の前にあるふすまが機械的に閉じ、彼女の姿——片目を隠した、ぼろぼろの和服の少女——を順路から覆い隠す。

お化け屋敷の行程の半ばに位置するアトラクションの一つ【墓場広場】で、ふすま女はそう切り出した。

「僕たち、新人九十九神の会による【人間を脅かして追い出して俺たちだけでフィーバーしようぜヒャッハー!】計画だが、一向に進展が見られない。それどころか、この場所を訪れる人間は増える一方だ。みんなの意見を聞きたい」

「ハイ！」

「よし。一つ目小僧、何だい？」

「がんばる！」

「具体的な方策を頼む」

一つ目小僧、商品名『サイクロプス』は人を驚かすことを心から楽しんでいるが、いかんせん頭が弱いのがたまにキズである。

「てゆーかーまじちョーありえないんですけど。あんたら真面目にやってる訳？ 気合足りないんじゃないの？ ああもう化粧したいーコスメ欲しいー」

「愚痴はやめるでござる生首。拙者だって腐り落ちかけているという設定の右目が本当に落ちそうで大変なのでござるよ」

「ハー？ お前ふざけないでよ落ち武者ア。あたし生首じゃないしー、アントワネットって呼んでくれますうー？」

生首、商品名『アントワネット』が、そう言って落ち武者にくっついてかかる。

「……というかね。当然と言えば当然なんだよ」

はあー、とふすま女が深いため息をついた。艶のある、首までのおかっぱ髪を指で弄る。

「だって此処、お化け屋敷じゃないか」

「「「「ですよねー」」」」

——長い間放置されたモノには霊が宿る、という話がある。

人の来ぬ場所に忘れられた置き傘は、唐傘お化けとなって人を驚かせ気を引こうとし、汚れたまま放置された古雑巾は白くうねって龍を模し、使いつぶされた草鞋は足を覆うのを諦め自ら足を生やし歩く。

千余年の昔に平安の都を練り歩いた百鬼夜行の大半は、由緒正しい鬼や化け狐、又工などではなく、そういった魍魎魍魎——九十九神（つくもがみ）が大半を占めていたという。

それは、現代においても例外では無く。そしてここは、そういった‘化生、達の溜まり場だった。何の因果か、放置され、錆びつき壊れかけていたお化け屋敷のセット達は揃って九十九神と化し、独自の意志を持ち始めたのだ。

「化生としての力は、化生らしく過ごした歳月に比例する。あんまり人気になると、正直ヤバイんだよ」

「最近は、整備はされるわ、磨かれるわ、油は差されるわでござるからなあ。……このままでは、拙者ら、ただの機械に戻ってしまう」

「ハゲが綺麗に磨かれてるね！ ランスロット！」

「これはサカヤキでござる！」

さかやき——月代。武士がよくやってるあの真ん中ハゲの髪型。

ふすま女は腕を組んで一つの提案をする。

「驚かすのをやめる、という選択肢はない？」

「おどかさなきゃお化けやってる意味無いよ！」

「あたしはあ別にいいんだけどお。でも、カップルとか見てると正直ムカツくっていうか、死ねみたいなの？」

「……そんなこと言われてられる場合でも無いだろう？」

「いや、どのみちそれは不味いものではござらんかふすま女殿。今評判が悪くなると、最悪、拙者らを撤去して新しい機材を入れよう——となってしまいう可能性があるでござる」

「行く度に出し物が変わるお化け屋敷、として、ますます評判になった。

『もうどうしろと……』

まだ開園時間である。【電信】で呟きながら、ふすま女は頭を抱える。とりあえず駄目だしを始めよう。

『とりあえずゾンビ！ キミが悲鳴を上げてどうするんだよ！』

『ハッハッハ、口をつつしみたまえ。貴様は今、墓場王の前にいるのだぞ』

『墓場王って何！』

『富、名声、力。全てを失った無職の男——それが墓場王』

『ただのニートだよそれ！』

ゾンビ（商品名、『あなたとゾンビにファミリー〇ート』）はやたらに偉そうだった。

『ちくしょうお前ら馬鹿だ……』

『ま、まあふすま女殿、そう気を落とさずにな……？』

氣遣ってくれる落ち武者の言葉が身にしみる。ああちくしょう良い男だなランスロット。落ち武者でメカで妖怪だけど。属性過多にも程がある。

『ふん、もう六時か……』

屋内からは出られないが、一応時間は分かる。営業終了にはまだ遠い、むしろお化け屋敷という性質を考えればここからコアな客が増える。

黄昏時。もともとは【誰そ彼】の意味があり、すれ違う人の顔が分からない程に薄暗いからという意味だ。同時にこの時間から彼らの化生としての力も増し、自由に歩きまわれるようになるのだが、流石に営業時間内にそれはマズい。今そんなものを見せたら大変なことになるだろう。

ならばどうやって会話しているかというと、各々に繋がれている配線越しに電信(?)で会話が出来たのだ。若干混雑しやすいのが欠点だ。

『マジありえないんですけどー』

アントワネットの愚痴が届く。

『カップルもやたら多いし。ああもう、私にも、白馬に乗った生首の王子様が現れないかしら。水嶋ヒロみたいなイケメン希望でえー』

『……途中の条件が厳しすぎると思うんだけど。何？ そいつデュラハンなの？』

『……生首殿。男は顔ではござらんぞ』

『他にどこを見ろっていうのよ！』

『うん、君が言うとお切実だなあ……』

生首だもんね。

『だいたい……』

新たな案を模索しようとしたその時。

ふと、ふすま女の耳が電信ではない声を受け取った。

『人間が来た、ちょっと回線切るよ』

断りを入れて、脳内に響く声を切る。さて、相手によるが、今回はどうやって脅かそうか。いい加減、とりのこされこうべ、の怪談のネタも切れて来た。ここのお化け屋敷のモチーフとはいえ、どうも自分にはそっちのセンスは無いらしい。

こうなったら政治ネタとかで行ってみようか。都条例ネタは——と、そのようなことをつらつらとふすまの中で考えていたところで、彼女はその声に気付く。

「うーん……ひっく……ひっく……」

その声の主は、怖がらせるまでも無く、泣いていた。

「お兄ちゃん……みんなあ……どこお……？」

震えた声を掠れさせてやってきたのは、小学生の低学年くらいの男の子だ。

やがて彼の脚はセンサーに引っ掛かり、ふすま女の前のふすまが開く。

「あ」

「ひっ……！」

目が合う。腰が砕けて尻餅をついたその男の子は、怯えきった目でふすま女を見上

げる。

「……っ」

うっわあ……。と、ふすま女は思った。

怯える人間、怖がる人間、恐れる人間。自分たちが求めてやまなかったもの。人に見捨てられた九十九神としての娯楽。ここでもっと怖がらせれば、さぞかしすかっとするだろう、そう頭では考えた。が。

「やだ、やだよう、怖いよう……」

震える声と、どこかで転んだのか、擦り剥いた膝。手まりのように縮こまって、細腕で頭を抱える。言葉にならない言葉を呟く、少年の様子を見て、ふすま女は溜息をついた。

流石にこれを驚かすのは、人としてどうなの。と思った。人じゃないけど。

「……ねえボク。どうしたの？」

「うあ……？」

ふすま女は、出来るだけ穏やかに話しかける。男の子は顔を上げると、どうしてこの人は、ふすまの中にいるのだろう、という目でふすま女を見上げた。

「ボク、名前は？」

「……あきら……」

「そうか。あきらくん、どうしたの、こんなところで」

ゆるやかな動作で、微笑む。慣れてないので上手く出来ているか不安だったが、どうにかそれで男の子——あきは安心したように震えを止めた。

「……お兄ちゃん達といっしょに来たの。だけど、いつの間にか、いなくなっちゃって……」

はぐれたのか。そういえばつい数分前に、3人くらいの少年グループが来ていたが、多分そいつらだろう。

全く、弟と逸れて気付かないなんて、人でなしもいいところだ。とふすま女は憤った。人じゃないのは彼女の方なのだが。

「ほ、ぼく、ここ、怖いので、それで」

「うん、……うん。そっか、大変だったね」

「うん……もう、やだよう……」

会話が途切れる。しばしの沈黙。

「ね、お姉さんが外までついてってあげようか？」

その提案に、にわかに少年が顔を上げた。目が輝かせて、ふすま女の言葉を確認める。

「ほ、ほんと？」

「ホントホント。お姉さんね、ここにいる、怖いので、とお友達なんだ。だから、お願いだから出てこないで下さい、って頼んであげる」

そう言ってふすま女は、開いたふすまを抜け、通路に降りた。先述の通り、この時間帯なら独立して動くのはさほど負担ではない。あきらが目を見開いた。くすくす笑って、和服の裾が乱れないよう気をつけながら屈みこむ。

「大丈夫、君は強い子だよ。だって、一人でここまでこれたんだから」

「……本当？ 僕、つよい？ えらい？」

「うん、偉い偉い」

差し出した手を、小さな温かい手が掴んだ。男の子の方から、小指を絡める。

「じゃあ……指きり」

「……ふふ、そうだね」

子供らしい言葉に、笑って頷く。

「ゆーびきーりげーんまーんうーそつーいたーら」

「ハーリセーンボーンの一ます」

……心無し、ハリセンボンの発音が魚の方だったような気がしたが、まあ誤差の範囲内だろう。そのまま手を握ってゆっくりと立ち上がる。ふすま女は、元から少女の霊として作られたものだ。二人の背丈はあまり違わない。そのまま、ゆっくりと歩き出す。あきは小さくつんのめったが、すぐについてきた。

「……お姉さん、手、つめたいね」
「あきらくんは、あたたかいね。羨ましいなあ」
「でも、お母さんがいった。手がつめたい人は、こころが温かいんだって」
あきらが、無邪気に笑った。
「……そ、そう？ なの、かな」
ふすま女は慌てて目を逸らした。機械の体は温度が変わることはないが、それでも、頬が熱くなった気がした。

当然ながら、同志からの反感は強かった。
驚かせるべき、脅かすべき人間を助け、挙げ句の果てに、さんざ気をつけていた十九神の姿まで晒して親切に外まで案内するなど、正気の沙汰ではない。それでどうして、お前は我々に、子供が怖がるから出てこないでくれなどと頼みごとが出来るというのか。誇りを知らぬのか、貴様、恥を知れ——
——などということは、さらさらなく。
具体的には。
『うっわーシヨタコーン』
『ふすま女、まさかそんな趣味だったなんてー』
『未成年者略取現行犯ー』
『ロリ誘拐ー』『シヨタ誘拐ー』
『やーいお前の父ちゃんソクラテスー』
「うっさいわあああああああああ！ あとソクラテスに謝れ最後の奴！」
突然叫んだふすま女に、びくりと少年が震えた。今の今まで、彼の家族や学校について楽しみに話していた口を閉ざして目を潤ませる。
「ご、ごめ、ごめんなさ……」
「あ、ああ違うんだよ！ ごめん！ ちょっとね！？ 気にしないで、話続けて！」
口からの言葉でフォローしつつ、頭で電信を飛ばす。
『黙れっつってんのシャラップ！ というかいいだろ、僕だってこれでも設定年齢1×歳の女の子なんだぞ！ きゃぴきゃぴるんでイける年頃なんだからネ！』
『ふすま女殿、控えめに言ってセンスが戦前レベルで古いでござる』
『酷っ！？ つかござる語尾の奴に言われたくないよそれっ！』
『おうふ……』
『ああっ、ランスロットが落ち込んだ！ これがホントの落ち武者！？』
『一つ目、少し黙りなさい。——ねえ、聞こえる、ふすま女？』
『ん、何……？ 生首もといアントワネット』
『——リア充爆発しろ、いや成仏しろ、いやむしろ除霊されろ？ ああ、もういいわ、とにかく——死ね』
『せめてもうちょっとオブラートに包んだものを！』
人の世はいつだって厳しいのである。人じゃないけど。
それでも、なんだかんだ言ってふすま女の頼み通りに出てこないでいてくれるあたり、彼らもお人好しだった。まあそれでもやっぱり人じゃないけど。
「お姉ちゃん、大丈夫？ なんだか、辛そうだけど」
「うう、ありがと……あきらくんは優しいな……」
頭を撫でると、あきは頬を染めつつそっぽを向いた。子供扱いされるのは悔しいけど撫でられるのは嬉しい、そんな態度だった。自然とふすま女の頬も緩む。
しかし、そんな心温まる異文化間交流をしているうちに、かなり出口が近づいて来た。出口には人がいる。子供ならともかく、大人や従業員にバレたら大変なことになるだろう。
「……ごめんね、あきらくん。お姉さんは、ついていけるのはここまでみたい」
「えっ？」
男の子の目元が、縋るようなものになる。雨の中の子猫のような瞳に、思わず手

を伸ばしかけて——何とか、止める。ここで引きとめてしまったら、それこそ何をしているのだろう、だ。

「ここまで来たら、あとはもう少しだし。それに、お姉さんはいつもここにいるから。会いたくなったらいつでも来れるでしょ？」

その言葉は、無意識ではあったが、どちらかといえばふすま女自身の言葉だった。会いに来てくれたら、と。

だが、あきらも同じことを思っていたらしい。少年は頭半分ほど高いところにある少女を見上げ、聞き返す。

「……ホント？ 会える？」

「ほんと。……それとも、ここは怖いから、やっぱり君一人じゃ来られないかな？」

「そっ、そんなことないもん！ 一人で来れ、これら、来られるよ！」

薄く笑むふすま女の台詞に乗って、ぶんぶんと少年は首を振る。舌足らずな言葉を何度も繰り返して。あははとそれをふすま女が笑うと、ぷうと頬を膨らませた。

「じゃあ、ぜったい次はひとりでくるからね！」

「なら、大丈夫だね。……それじゃあ、さようなら、あきらくん。お兄さんたちによるしくね」

「うん！ ……じゃあ、またね、お姉さん！」

手を振りながら、何度も振り返りながら、少年は一人、通路の先に行く。足を留めたふすま女はその姿を見送りながら電信を飛ばす。この先にいる同胞は、確か壁男、商品名『ウォールGAY—暗黒の木曜日—』だけだったか。最後の最後、出口のすぐ傍の壁から出てきて驚かせる役。定番と言えば定番である。

『聞こえるか、壁男。出て来ないでくれよ。今度何かおごるから』

『——』

だが、お化け屋敷全域に繋がっているはずの電信が、返って来ない。

『……？ おい、壁男？』

『ア——ふすま——』

『なんだ、回線が悪いな——って、え？』

電線が古びてきたのか、と思い掛けて、ふすま女はすぐに思いなおす。そして、考え直す。

回線が悪い？ ——仮にも、九十九神の影響を受けて半ば以上化生となっている回線が？

同時に、掠れた返事が脳内に届いた。

『オイ、——すま女、聞こえっ、か！』

粗暴な男の声は、いつに無く焦っていた。

『何だ、……どうした、壁男！ 聞こえるか？』

『マズイぞ、——つきから、おかし——と思ったんだ！ クソ、……ざけやがっ、て！』

ザーザーとノイズが走る。普通の回線は、物理的な原因によって不備が生じる。ならば、彼らの回線にノイズを走らせることが出来るのは、一体何なのか？

パキパキ、バチバチという、騒音混じりの電信が——いや、違う。これは、騒音じゃない！

「——ラップ音」

『午後になってから、一人もここに来てねえんだよ！ 回線も全然通じねえし！ オイ、すぐ近くにいたんだな、気をつけろふすま、——その辺に、何か、いるぞ！』

ばっ、と意識を現実の方に戻す。

「あきらくん、待って！」

思わず口調を素にして叫ぶ。だが、届かない。あきは、通路の向こうの、最後の出口まで続く曲がり角を、今まさに曲がろうとしていたところだった。

咄嗟に走り出す。和服だ、いささか走り辛い。息を切らして、下駄を転がしながら駆ける。

「っ！ 良かった、あきらくん、捕まえ——」

曲がり角から伸びていた真っ白な手を、ギリギリで掴んで——

《捕まえた?》

——その手が、声が、あきらなものではないことに、背筋を凍らせた。

《お姉さん、追いかけてっこしていらっしゃるのですか?》

鈴の鳴るような声。幼さの中にほんの少しの色気を孕んだ、年頃の少女の声だ。しかし、それだけなら美しいその声は、どうしようもなく軋んでいた。錆び付いた鈴を何十も同時に叩きつければ、こんな音が出るだろうか。

《ねえ、お姉さん、追いかけてっこですか、それは楽しそうですね! ね、え、お、ね、え、さ、ん、た、の、し、そ、う、——で、す、ね? うふふ?》

そこにいたのは、一昔前の女学生のような姿の少女だった。

可愛らしい少女だ。鴉漆の髪は、上等なかんざしで結わえてある。新雪のような初々しさと萌木のような活力を感じさせる無邪気な愛らしさ。言葉の発音は丁寧で、育ちの良さを窺わせる。通り過ぎる誰もが振り返るような美少女。

——それが、人間でさえあったなら。

「き、君、は……」

《不躰なお願いで申し訳ありません。不躰なお願いしてもいいですか? 私もご一緒させていただいても、ご、い、っ、しよ、さ、せ、て、いただいてもよろしいですか? 私、自慢ではありませんが、自慢では無いのですよ、こうみえても運動には自信がありますの。あら、かわいらしい、——か、わ、い、ら、し、い服ですね、素敵ですよ》

不安定な言葉が、豪雨のように押し寄せる。

少女の端々の輪郭は、霞んでいた。

つややかな黒髪は、先に至れば火葬場の灰のような色に汚れ。艶やかな服の袖や袴は、まるで嵐に晒されたかのように無残に引き千切れている。

その霞みが——`場所、を歪めていた。

少女の姿にそって、周囲の景色が歪んでいる。足先は空気に同化し確認できず、髪先端は広がって壁と同化しており、少女が体を揺らす度に、その歪みも深まったり浅くなったりした。

ふすま女が掴んだ手は、——真っ白な骨。

四肢が白骨化していながらも、無邪気さを湛えた少女の瞳が、ふすま女を見据える。

《そうと決まれば、さあ、私の【とぼり】に行きましょう!》

引かれた手が、何も無い闇に呑み込まれた。咄嗟にそれをふすま女は振り払う。しかし、そこで気付いた。気付いてしまった

少女が歪めた闇に、開こうとしている闇の先に、見知った少年の顔が浮かんでいた。目を閉じ、意識を失っているらしきその顔は、つい先ほど見送ったはずの、

「あきら!」

《あら、いっしょに来ては下さらないのですか?》

振り払われた手に、少女の言葉が、僅かに沈む。だが、すぐに、ばあと顔を輝かせた。

《そうですか、まずはあなたが鬼をやってくれるということですね! 申し訳ありません、わたくし、そういったことにあまり気が回らなくて。まわり、まわり。くるくる、く、る、く、る。——くるくる、楽しいですね?》

ぱん、と口元で少女は手を打つ。それを合図に、彼女の姿は、その中に内包したあきらと共に——周囲の闇に紛れて消えていく。

《では、失礼致しますね》

「待っ……!」

霞んだ体で、その少女は優雅に一礼し——

《わたし、かれこれ半世紀くらい`とりのこされ、ていて、退屈なんですの。それでは、えれがんとに始めましょう?》

——その姿を、消した。

以下、ときめきレジャーパラダイス、お化け屋敷の入り口にある看板より引用。
『恐怖! 《とりのこされこうべ》の伝説!』
第二次世界大戦下において、空襲の際に山に逃げ込んだはいいものの、そこで家族とはぐれ、遭難し、そのまま孤独に死に白骨化した少女の怨霊である。
彼女は未だに自分を見捨てた人間を恨み続けていて、山に迷い込んだ人間を遭難させる。また、それが子供ならば、一緒に遊ぶために、別の世界に連れ去ってしまうと言われている。連れ去られた子供は、疲労し餓死するまで、少女と遊び続けなくてはならない。
このレジャーパークはその山を潰して建てているので、探せばどこかに彼女がいるかもしれないぞ☆』

「……………いたな、彼女」
「いたでござるな、彼女」
「いたね! 本物のとりのこされこうべちゃん!」
「というか予想外にエピソードが重くて、ちょっと対応しきれないわ」
その日の閉園後。
会議の場所はいつも通りの【墓場広場】。しかし、いつもと違うのは、馬鹿話が交わされていないということ。ふすま女に生首、落ち武者、壁男が中心となって、彼らは真剣に話し合っていた。
「僕も、……まあ僕の立場で言うのも何だけども、てっきりスタッフの捏造かと思ってたよ。まさか、ホントにいただなんて……何が『このレジャーパークはその山を潰して建てているので』だよ。お祓いしろよ。日本建築の基本でしょ」
「捏造が形になった、という可能性はねえのか? 語られている内にカタチを為したってエタイプの、噂先行の奴だっているだろうよ」
近くの壁を滑るように移動する男の上半身——壁男の指摘に、ふすま女は首を振る。
「それにしても、力が強すぎる。存在だけで僕たちの回線を妨害し、——固有の異世界まで展開していた。ときめきレジャーパラダイスが出来てから——つまりここ二、三年で発生した妖怪とは思えない。本当に遭難して、本当に死んで、本当に化けて出て、それが語り継がれていたんだ」
「ふうん。……それで、どうするのよ、ふすま女」
「え?」
生首が、ふすま女の目の前で、ふわふわと浮いていた。
「聞いたけど、結構な騒ぎになってたわよ、人間ども」
「それは……」
当たり前だ。壁男の言葉から逆算するに、今日の午後いっぱい客は、全員あそこで待ち構えていたとりのこされこうべに取り込まれている。園内で一日に十数人も同時に行方不明者が出るなど、人間の世界にとってはかなり異常事態だろう。
「そりゃーもう、色々聞こえて来たわよ。大問題だーだとか、近々ケーサツが調査に来るーとか、……この問題が解決しなければ、エイギョウテイシになる、ってさ」
「営業停止になれば、拙者達にとっては非常に都合がいいでござるな。これ以上客が来ることも無し。されこうべ殿とて、あちらから我々を取り込もうとするほど無節操では無いようでござる。でなければ、近くにいた壁男殿が真っ先に取り込まれているはずでござるからな」

「なるほどー！ つまりどういうこと？」

「一つ目、てめえちょっと黙ってろ」

「……………」

そうだ。彼女の行動は、ふすま女たちにはなんら害を与えない。むしろ有益でさえある。

対策会議と銘打ってはいるが、つまるところ、対策など必要ないのだ。

「そうだ、な。僕たちは——僕は、何もする必要はない」

分かっている。そんなことは、初めから分かっていたことだ。

だから静かに、ふすま女は決意した。

人間が憎い。

とりのこされこうべこと、本名・木更津桜子の感情は、ここに至るまで決して一定していたわけではない。伝承のように、ずっと恨みや憎しみに縛られてはいない。

人であった頃は家族や友達は大好きだった。空襲警報に怯え、山に逃げ、そして取り残された時は、ただ悲しかった。結局海を超えてやってきた爆撃機が襲ったのはここよりずっと遠くの街で、みんなは安心して山を降りて、自分だけが遭難した。毒の実に苦しみ、痛んだお腹を抑えながら、どこかの木の下で命を諦めた時には、人に限らず自分を襲った現実の全てを憎んだ。

だが、化生として化けて出て、永い間を存在する内に自分を見捨てた人間への恨みは無くなった。というよりも、全く別の存在になったことで人間という生き物への興味が薄れた。病死した人間がウイルスを恨むことがあるだろうか？ 車に轢かれた人間が、この世から車を全て殲滅してやる、と意気込むことがあるだろうか？ どうでも良くなった、というのが真実だ。

だから、現在。

彼女は、彼女の生まれた過程とは全く別の理由によって、人間を憎んでいた。その為、人を迷わせ、人をさらい、人をもてあそぶ。

彼女は、人を憎む。それは、病的とすら言えた。

《ふふ。ふふふふふ。トモダチがいっぱい、ひ、ふ、み、よ、いつ、む、なな、や。ああ、お父様は今頃何をしているのでしょうか、でしょうか？ きっと死んでしまっていたら桜子は悲しいです、でも、またお勉強を教えてほしいな、ねえお父様？ どこにいますか？》

広々とした丘。生ぬるい風が背の低い草を揺らす。鬱蒼と茂る森とはかけ離れた、夕陽の差し込む美しい姿。丘の頂上には、一本の木。これが彼女の作りだす異世界にして遊び場——彼女の【トバリ】だった。

無論、優美なだけの景色では無い。丘のふもとの方には、大量の骸骨が、風化して土と同化している。——彼女に囚われた人々の、なれの果て。

それらに彼女の注意が向くことは二度と無い。今の彼女は、一人の少年を愛しい我が子のように——あういは大切な人形のように——抱きかかえ、木の周りに寝ている二十人ばかりの生きた人間たちをどうするか執心していた。

《なにをしてあそびましょうか？ どれだけあそべるでしょうか？ これだけいれば、三日くらいは、み、っ、か、くらいは保ちますよね？ ——あら、あらら？》

そこで、桜子は首を傾げる。くすくす笑って、首を水平方向に百八十度近く回して、あり得ない角度から景色を笑う。彼女にとっては歓迎の笑み。このトバリに入ってきた者への。あれはきっと、人間よりもずっと、彼女を楽しませてくれるだろう。

《ようこそいらっしゃいました、お、きゃ、く、さ、ま?》

トバリの地面を踏み締め、和服姿の少女——正確にはそれを模した、金属とプラスチックの集合体——更に行くなら、それが放置された末に命を持った、九十九神であるふすま女は、じっと丘の頂上を見据えた。

とりのこされこうべの領域を見つけ、入り込むのは造作も無かった。というよりも、開きっぱなしの領域の入り口がそのまま残っていた。余裕というよりも、ただ単に、本当に彼女は待っていたのだろう。

男の子を——気を失ったあきらを抱えて、とりのこされこうべはくすくす笑っている。

《鬼に文句を言うのもおかしい話ですけど、いささかならず遅いです。私、待ちくたびれてしまいました》

「……鬼は今回、君の方だよ」

《え?》

「逃げるのは僕さ。——その子を、返してもらってからね!」

会話に付き合う必要はない。彼我の距離は五十メートルほど。一方的に宣言して、一気に距離を詰める——!

「ずっ!?!」

だが、三步と保たず、ふすま女の歩みは止まった。止められた。何かに足を取られたふすま女は、派手に足をもつれさせ、頭から草原に突っ込んだ。

「痛、った……!」

体を起こそうとして、——それも出来ない。

「なにこれ、……草!?!」

《くさむすび》

倒れた足と、地面についた手が、草によって絡め取られていた。今の今まで十数センチ程度しかなかった草が瞬く間に伸び、ふすま女を拘束しに掛かる。

《私が鬼ですか? おに、おに。お、に。分かりました、でも、これで捕まえました。ここは私のトバリ、私の夢見た世界、私が夢見る現在進行形の理想郷。人間だった私を情け容赦なく殺した`現実、なんかとは違って、この場所は空気一つに至るまで、私の思い通りになります。この世界は凄いですよ、ねえ凄いですよ、す、ご、い、で、す、よ?》

「くっ、あ……!」

抵抗しようとしても、ぎしりと、締めつけられて体が軋む。

これが本物の化生。時と心を積み重ねた異形のモノか。レベルが違う。所詮、たかだか発生して二、三か月程度の道具モドキが抗える相手ではない。

だが。

「つ、ああああっ!」

ふすま女は叫ぶ。腕も折れよ足も折れよと、折れぬ意志で草の拘束を抜けようとする。数本の草が圧力に耐え切れず千切れ飛ぶ、だが解けた端から新たな草が伸びて絡みつく。無駄な努力。

「くっ……かつ……」

やがて、息を切らせたふすま女が地面に崩れ落ちる。それでもまだ体を震わせるのを見て、少女は初めて、表情を僅かに歪ませた。

不快そうに。

《……何をしたいんですか、何がしたいんです、あ、な、た、は? わたくし、頑張っている人を応援したいのは山々ですけど、残念ながら無念ながら、ざ、ん、ね、ん、む、ね、ん、ですけど——潰れないように虫を踏むのは、とっても難しいんですよ》

ばきんと。

ふすま女の二の腕が、あらぬ方向に曲がった。鉄パイプのような空洞の中身が露わ

《もう、いい。つまらないおもちゃも、きらい!》

少女が伸ばした手のひらを、ぐっと握る。

それに応じて、藪がふすま女の姿を呑み込み――

「良く言ったでござる」

――朽ち果てかけた日本刀が、それを切り払った。

「!？」

《!？》

驚く両者。

そして現れた落ち武者が、日本刀を得意げに掲げ、高々と見得を切る。

「遠ければ音に聞け、近ければ目にも見よ! やあやあ我こそは、ときめきレジャーパラダイス、お化け屋敷が総員の一人、落ち武者ランスロット也! 行けい、皆の衆!」

「ヒッパハ―祭りじゃ喧嘩じゃ江戸の華じゃー!」

「わーい! 僕も混ぜて混ぜてー!」

「な、な、な、君たち、何でここに!？」

拘束を解かれ、手を取って引き起こされ、ふすま女は尋ねる。落ち武者は笑って答える。

「バレッバレなのでござる、ふすま女殿は」

「てっきり、あの場で提案してくれるかと思って発破かけたのに、まさか一人で行くとするとはね。アンタ馬鹿あ?」

生首が目の前でふわふわ浮いている。ペロ、と舌を出してにやりと笑う。

「で、でも。君たちに戦う理由なんて……」

「ハッ。俺達のシマを荒らした奴に、きっちりケジメつけてやらなきゃならねえだろ?」

足元から壁男が現れる。それだけ言っただけで首を鳴らして、また地面に溶け込んだ。

「君ら……」

「今更帰れとは言わないでほしいでござるな」

「というか無理よ。一つ目とか見なさいよ。絶対理由分からずに暴れてるわよアレ」

同胞たちは好き勝手にとりのこされこうべに向かって行っては、巻き起こる突風や藪に撃退されている。しかしとりのこされこうべの表情にはもはや余裕は無くなっていた。何せこの数だ。人海戦術にも等しい。人じゃないけど。

「ああもう、――じゃあ、行こうか!」

酷く楽しげに笑って、ふすま女は駆けだした。

《うっとうしい、ですっ!》

草を操り、地面から伸びて来た壁男の腕を縛る。空気を操り一つ目小僧を吹っ飛ばす。金属で出来たアトラクション。ゾンビ、亡霊、死体に悪魔の模造品。

一人一人では取るに足りないはずだが、何十もの化生が一斉に向かって来て、格では遥かに勝る彼女を追い詰めている。

《何で――どうして、人なんかの為に――!》

「化生は人を憎むなんてね、――設定が古いのよ、アンタは!」

遠くから、宙に浮いた生首が叫ぶ。自在に空を飛んで突風をかわす。

「拙者らのように `ふりいだむ` に生きる方が、 `なう`、な `やんぐ` に `ばかうけ`、なのでござる!」

「落ち武者は言ってるのが古いね!」

草むすびを斬り払いながら、落ち武者が叫ぶ。

おかしい。とりのこされこうべの瞳に涙が浮かぶ。思う通りにならない。ここは、私の世界のはずなのに。

《あなたたちに何がわかるですか——私の恨みの、何が分かるっていうんですか!》

男の子を抱えながら、世界を操る。全力だ。彼女は半泣きで、抱えている闇を、背負わされた業を、人へのどうしようもない恨みのその原因を、吐き出していく。

《『とりのこされこうべ』なんていう、冗談みたいにダサい名前をつけられた、私の哀しみの何が理解出来るっていうんですか!？》

——世界が、止まった。

「……………え。問題、そこ？」

思わず素に戻った生首が問いかける。

《そこですよ! なんですかこのネーミングセンスの駄目な感じわ! 私を馬鹿にしているんですか!？》

「いやあ……でも、化生の名前なんてそんなもんじゃない？」

《とい—ますか、『されこうべ』ってのは頭蓋骨のことです! 私まだそこまで骨じゃないですうううう!》

「……し、しかし、人間がつけるものではあるし、仕方ないのではござらんか？」

《ランスロットだなんて格好良い名前持つてる人には言われたくありません!》

「……………」

あながち間違っちゃいないから反論できない。ちなみにランスロット→アーサー王伝説において王を裏切った騎士→堕ちた騎士→意識して落ち武者、というネーミングらしい。連想ゲームか。

色々な意味で沈黙する戦場。

「——そうか。君は——」

だがそこに、そんな声が生まれた。

《あなたは……!》

戦線を乗り越え、丘の上まで後一步の所まで、ふすま女は迫っていた。もげかけた手に、傷だらけの肌。ポロポロになった和服を風に踊らせながら。

「——君も、そうだったんだね。分かるよ、その気持ち」

《分かる!？》

キャラ付けも忘れて、少女が激昂する。

《何が分かるんですか、貴方のような九十九神が!》

「分かるさ。——だって、僕は、君なんだから」

《何を訳の分からな……!》

いきり立って、大気を操ろうとした少女の手が、止まる。ふすま女の破れた服の下、胸元に刻まれている文字が、目に入ったからだった。

そのとき初めて、彼女は、自分の目の前にいるこの九十九神の正体に、気がついた。

《そんな、まさか、貴方は——貴方は……! 》

「当然さ——入口の看板に書くほどに、君をモチーフにして作られたお化け屋敷だよ。そこに、君、が置かれてないわけがないだろう？」

そして、ふすま女は、名乗り上げる。

「名乗るよ。お化け屋敷のアトラクションの九十九神。——商品名『特注品：とりのこされこうべ』」

《そんな……》

信じられない、とばかりに、とりのこされこうべの少女が、力を失った。その前に、静かにふすま女が立つ。同じ名を持つ二人は、しかしてひどく対照的に、向かい合う。もはや、とりのこされこうべに抵抗の意志は無かった。彼女と、彼女が抱くあきらを見て、ふすま女は静かに微笑む。

「その子がお気に入り、ね。感性も似てるのかな？」

そしてふすま女は、眠ったままのあきらごと——とりのこされこうべの小さな体を、抱き締めた。

「今まで、辛かったね。——でも、もう大丈夫。これからは僕も、君と同じ業を背負うよ。だって、僕は君で、君は僕なんだから」

《う、あ……》

少女の腕が、おぞましい骨の姿から、生前のそれに、戻っていく。

年齢相応の華奢な掌が、まるで生まれて初めてものに触れるかのような弱々しさで、ふすま女の冷たい背中に回った。

《うああああああああああん！》

化生の姿は、その心象に寄るのだと言う。

取り戻した四肢は、死んだ瞬間のままだった彼女の心が、ほんの少しでも満たされた証だったのだろうか。

「なあ、こりゃあ何だ。感動するところなのか？」

「すごい予想外の所から説得オチ入ったわね」

「……………きっとそんなもんなのでござるよ、人生」

人じゃないけどな。

そんなこんなでエピローグ。

その日、ときめきレジャーパラダイスのお化け屋敷にて行方をくらました十数名は、その全員が次の日の朝、お化け屋敷の出口付近に倒れているという形で発見された。

救助された人々は全員、姿を消していた間のことを覚えておらず、自身が行方不明であったという自覚すら無いようだった。警察にしても、被害者達がそんな風であるから、まともな調書を作成することも出来ず頭を抱えるばかりであった。

——いや。ただ一人。まだ幼い子供であるが故に、証拠能力不十分として無視され

た証言がある。

その少年は、薄っすらとした記憶を探るようにして、『お姉ちゃんが助けてくれた』としきりに繰り返した。

だが、行方不明者の中には少年の言葉に当てはまるような人物はおらず、寝ている間に夢でも見たのだろうと言うことでその証言は黙殺されたのだった。

そんなわけで、警察は早々にこの事件の捜査を打ち切ることに決め、これによって、閉鎖の危機ですらあったときめきレジャーパラダイスの首はなんとか繋がった。どころか、この事件によってお化け屋敷にますます箔がついたなどと、のん気なことを言いだす従業員まで出る始末だった。

「……良かったのでござるか？」

「何が？」

いつもの墓場広場。戦勝(?) 祝いに馬鹿騒ぎする仲間達を見るふすま女と、その隣で刀を研ぐ落ち武者がいる。

「あきら殿である。目が覚めないままに、外に送ってしまったが」

「別れの言葉はとっくに済ませてるんだ。僕は、彼を外に案内した。それだけの話だよ」

「……ふむ。ふすま女殿が良いのなら、拙者は何も言わないでござる。加えて、もう一つ聞きたいのだが」

「何だよ？」

「そこの」

視線が、ふすま女の隣に向く。

「とりのこされこうべ殿——いや、それではふすま女殿と被るのだが——」

《——桜子です。そう呼んで頂けますか?》

「ふむ、では桜子殿、と。良い名前ですね」

《有り難うございます、ランスロットさん》

四肢を取り戻した彼女は、大和撫子を体現したかのような可憐な笑みを浮かべて見せる。

「彼女はどうするのでござるか？」

「それだよ、落ち武者！」

よくぞ聞いてくれたとばかりに、ふすま女がビツと指差す。

「彼女の【トバリ】を使えば、今までの比にならないくらいに人間どもを脅かすことが出来るようになるに違いない! ついさっき協力を取り付けたところさ！」

《別に私としては、そのまま中でじっくりとっくり餓死させてもいいと思うのですが、ふすま女さんがどうしてもというので、色々——い、ろ、い、ろ、案を練っていますです》

「ほうほう……それは楽しそうでござるな! 拙者も協力するでござるよ！」

「なにになに、何の話ー？」

生首や他のアトラクションも混じって、騒がしい夜が更けていく。新しい仲間も増え、人々を驚かせて逃げかえらせる為、今日も彼らは努力を怠らない。あくまでフリーダムに。

……ここが『外見からは想像もつかないほど広い場所があるお化け屋敷』として更に評判になるのは、すぐ後の話である。

仕方ないね。

[戻る](#)

